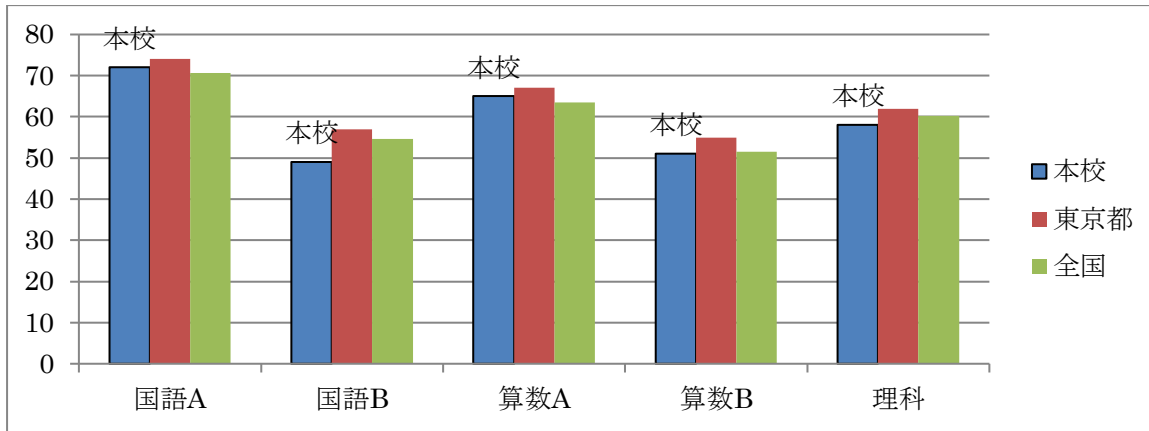


平成 30 年度 全国学力・学習状況調査(6 年) 考察

江戸川区立第五葛西小学校



6 年 国語 <考察>

【国語 A】

平均正答率は全国 70.7%、東京都 74%、五葛西小 72%となっており、都の平均と比べて 2 ポイント下回っているものの、全国平均より 1.3 ポイント上回った。領域別では「書くこと」「読むこと」が都の平均より 1~2 ポイント上回る一方、「話すこと・聞くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は都の平均より 0.5~1 ポイント下回っており、比較的これらの領域で得点が伸びていない。

解答の詳細を見ると、筋道を立てて説明する力を問う問題、適切な敬語の使い方を問う問題、漢字を正しく書く問題で正答率が低かった。説明する力については、相手の知識を確認し、意図を捉えることが難しかった。敬語や漢字については、日常でこれらを使う場面がまだ十分でないと考えられる。全体的に語彙の少なさによる不完全な回答が見られ、語彙を増やすことで表現力も伸ばせると考える。

<授業改善のポイント>

説明の仕方を工夫する手立てとして、言葉を置き換える、内容や順序を考える、相手の理解の状況を確認しながら説明することなどが考えられる。指導として、例えばクラブ活動や縦割り遊びについて、下級生に伝わるように説明する場の設定が考えられる。難しい言葉を置き換えたり、相手に応じて内容や説明の順序を考えたりし、はじめのうちは話す練習や推敲をしながら準備する。これらの活動を日常的に行うことで慣れていき、相手に応じた説明をする力を養う。

敬語を使う際は、相手と自分との関係やその場の状況を意識して、適切に使うことが求められる。具体的には、学校行事などにおいて地域の方々や保護者と話をしたり、案内状や手紙を書いたりする活動が考えられる。また、自分や身内に関わることは尊敬語を使わないことなど、公の場における言葉の使い方の感覚を養うことも大切である。

漢字については、引き続き小テストなどで繰り返し復習する場を多く設定する。下学年の内容の復習に、東京ベーシックなども活用し、確実に身につけるようにする。

【国語B】

平均正答率は全国 54.7%、東京都 57%、五葛西小 49%となっており、都の平均と比べて 8 ポイント、全国平均と比べて 5.7 ポイント下回っている。領域別では「話すこと・聞くこと」が 5 ポイント、「書くこと」が 7.3 ポイント、「読むこと」が 13 ポイントと、全て都の平均より下回っている。

解答の詳細を見ると、「書くこと」「読むこと」両方に関連して、資料から必要なことを読み取り、それらを踏まえて自分の考えをまとめることが課題である。資料の読み取りが足りず必要な情報を落としたり、自分の考えだけを書いてしまったりすることが多くなっている。

＜授業改善のポイント＞

目的に応じた資料の読み取りとは、自分が書こうとしている文章の種類や相手を踏まえて、自分の考えを裏付ける情報を資料から適切に取り上げることである。それらを使って自分の考えに根拠をもたせ、相手に伝わる文章を書く活動が必要である。

例えば、おすすめの本についての推薦文を書く活動が考えられる。相手にその本のよさを伝えるために、心がひかれた部分の叙述を抜き出し、自分の経験や考えなどと比べて心がひかれた理由を明確にする。伝記などであれば、人物の功績や逸話をほかの資料から集めることも効果的である。また、相手に伝わるかどうかという観点で、再度推敲したり、友達と相互に読み合ったりするなどの活動を取り入れることも有効である。

算数A

正答率は都の平均より 2 ポイント下回ったが、全国の平均に対しては学年が 65%と 1.5 ポイント上回っている。特に図形の領域では、全国の平均を 7.3 ポイント、都の平均を 2.5 ポイント上回る良い結果となった。しかし、「数と計算」の領域である「小数の除法」の問題と「量と測定」の領域である「単位量当たりの大きさを求める除法の式」の問題では、3～6 ポイント都や全国平均よりも下回っている。

＜授業改善のポイント＞

「数と計算」の領域である小数の除法に関する問題ができていないことから、学習をした時に今までの学年で習った計算方法をもう一度復習をするなどして反復練習を行うようにしたり、誤りの箇所を修正する活動を取り入れたりする。また、ベーシックドリルに取り組むことで、既習学年の内容であっても繰り返し練習することで確実な定着を図っていく。

「量と測定」の領域に関する問題でも単位量当たりの大きさを求める除法の式と商の意味を理解できるようにするため、ベーシックドリルを活用する。

算数B

正答率は都の平均より4ポイント、全国の平均よりも0.5ポイント下回っている。

領域別にみると、「図形」の領域以外の「数と計算」「量と測定」「数量関係」3つの領域において都と全国の平均どちらも0.1～4.7ポイント下回っている。また、下回っている問題を評価観点と問題形式について着目してみると、数学的な考え方を記述式で答える問題について特に正答率が下がっている。

〈授業改善のポイント〉

数学的な考え方を身に付けるために、日常生活場面と関連付けさせたり、自分の考えをノートに書くことや考えた理由を話し合わせたりするなどして日頃から数学的に考える機会を設ける。また、しっかりと問題を読むことで、問題を解く際に何が分かっている、何を問われているのかということをおさえて問題を解くようにすることを習慣付けていく。

理科

全体として、正答率は都より4ポイント、国より2.3ポイント下回っている。学習指導要領の区分ごとに見ると、「エネルギー」「地球」の区分が大きく下回っている。

よって、本校の課題は「エネルギー」「地球」に区分される問題、観点では「科学的な思考・表現」として評価される問題にあるといえる。

〈授業改善のポイント〉

本校では観察・実験をしっかりと行い、それに伴う技能が高まっているといえる。今後は実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できるようにする指導を充実させる必要がある。そのためには、観察、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述する際には、自分の予想にとらわれずに事実と解釈の両方を表現することができるように指導することが大切である。

〔読み解く力〕

主として「活用」に関する問題では、都より6ポイント、国より3.2ポイント下回るという結果であった。正答率の低い問題は、予想が確かめられた場合に得られる結果を見通して実験を構想したり、より妥当な考えを作り出すために、実験結果を基に分析して考察するという問題だった。

〈授業改善のポイント〉

読み解く力を高めるために、実験結果の見通しを伴った解決の方向性を構想できるようにするためには、自らの予想や仮説を基に実験計画を立案し、実験を行う前に、予想が確かめられた場合に得られる実験結果を見通すことが大切である。例えば、回路の中をどのように流れているかについて、今までに学習したことや生活経験と関係付けて、根拠のある予想や仮説を設定し、図などで表現しそれを基に話し合う学習活動が考えられる。また、実験後に自分の予想と実験結果を比べるときに他者の多様な予想も比べることができるように指導することも大切である。